2022 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
教育学部 子ども発達学科	准教授	梶浦 恭子
最終学歴	学　位	専門分野
岐阜大学大学院教育学研究科 教科教育専攻・家政教育専修（修士課程）	教育学 修士	幼児教育学

Ⅰ　教育活動

〇理念・目標・方針・計画（方法）

（理念）

保育のおもしろさと豊かさを授業で学生に知らせ、実習や教育現場につながる子どもの育ちにふさわしい保育環境を整えることができる学生の感覚を磨く。また、子どもの行動理解を深め、生涯を通して自己課題を持ち続ける幼児教育者の育成を目指し、信頼される人格者を育てる。

（目標）

現代の教育（保育）現場に存在する多様な問題を解決する実践力を持たせる。また、保育者として「幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない」と幼稚園教育要領 領域「環境」（2017 文部科学省）にあることから、計画的に環境を構成する役割が果たせる豊かな表現力を習得させる。

（方針）

・乳幼児期の発達過程を学び、子どもの特性を理解できる。

・乳幼児期の特徴ある行動や生活の姿の実態に即した支援ができる。

・幼稚園教育要領（2017 文部科学省）保育の領域「環境」にある「周囲の様々な環境に好奇心や探究心を持って関わり、生活に取り入れる力を養う」ために、多様な事例を通して演習させる。

（計画）

・教科書の事例を用いたり、保育現場の映像資料を活用したりして、教育環境を幼児と創造する保育者の重要な役割や、乳幼児の発達の特徴に応じた保育者の指導援助のあり方を理解させ、まとめ、発表させる。

・事例を基にディスカッションを行い、多様な場面を予想して幼児の行動について思考させる。他者の意見を受け入れ、自分の意見をまとめる機会を適時持たせる。

・予習課題は必ず事前に授業内で提示する。予習課題を基に、授業課題を加え、授業展開する。

・学生には、教科書テキストに沿い、専門用語を含む文章で課題内容を記述させ、表現力を磨く。

・授業終了時、授業「振り返り」を提出させ、基礎演習内容の授業評価をする。

・模擬的な実践を行うための「導入」「展開」「まとめ」の指導計画案を立案させる。

・指導計画案には、「予想される幼児の活動」や「教師の援助、留意点」内容の記入ができ、模擬保育演習後は「振り返り」記録をし、自己課題を見つけさせる。

〇担当科目（前期・後期）

（前期）

なし

（後期）

保育内容（環境）、幼稚園実習理解、教職実践演習（幼・小）、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、

生活科教育法、卒業研究

○教育方法の実践

後期授業科目について

・体力的に完全ではなく業務軽減の配慮をいただき、以下の３科目を行った。

【保育内容（環境）】【専門演習Ⅳ】【卒業研究】

【保育内容（環境）】では、学生が、保育者、教育者となる意識を高く持ち、実習に備えて保育教材等を準備する意識が持て実習への期待感が備わるように、「保育内容（環境）」授業では（計画）を念頭に入れ、以下のように実践した。

1. 事例や映像を提示した内容は、遠い先の出来事ではなく自分事であるという意識が持てるように、保育者（あるいは実習生）の立場になる演習にした。事例の場面は、常に自分の目の前で起こることを想定し、現場の保育者（実習生）になり、その場面にどう幼児の行動と内面に向き合い、援助行動をするか、そして行動理由と心の動きを具体的に記述した後に発表させた。また、他社意見は現場においても自己評価と自己課題になる認識がもてるため、記録する指導を行った。

   指導計画と実習日誌の「子どもの姿」と「教師の配慮、留意点」記録につなげられると考えたからである。

2. DVD の映像資料（3 歳児と 5 歳児クラス）視聴のもう１つの目的は、模擬保育を学生が行うために教師の役割の理解と実践に向かうためである。幼児が通う園全体の雰囲気である環境と、教師の時間の経過による動きと、幼児の動きに応じる援助者である教師の指導・援助等、group ディスカッションを行うことができた。また、幼児の行動観察は、多様に予想される姿が浮かび上がり、幼児の心の内面を探る等、意見交流により確認し合えた。コロナ禍で実際にはできない園内の生活風景が映像によって、共有の認識がもてた。

3. 保育内容には欠かせない参考書「幼稚園教育要領解説」内の、指導案作成に必要な事項を、予習・復習課題としてワーキングペーパーに記述させた。特に、幼児期の発達の特性、また幼児の発達の実情にふさわしい保育計画案作成時の導入、展開、まとめについて、教師の役割である援助と配慮方法や計画的な環境構成等に関する箇所をまとめさせ、指導案作成時に活用するよう指導した。模擬保育演習後の「振り返り」記録の自己課題箇所については、実習時の部分指導後の流れと同じ工程の「振り返り」記録後には、全員にコメントを行った。自己課題の記述内容こそ、明日の保育への大きな役目があるため、重要性を伝えていった。

【専門演習Ⅳ】は、3 年次の専門演習Ⅰ，Ⅱで各自が興味、関心のあるテーマを選択したため、小論文の書き方「ゼロからわかる大学生のためのレポート・論文の書き方」を示し指導した。専門演習Ⅲで、堀篤実先生の多分な援助を学生全員が受けたこともあり、後期はスムーズであった。テーマはそれぞれに決めており「はじめに」、章立て、文章の書き方については、全文のある論文（梶浦恭子修士論文 2014「幼児の手が育む森の世界」）を常に傍に置くようにして文脈等の指導を行った。

卒業作品 3 人については、発達過程や子どもの特性を理解するテーマと目的を掲げ実践した。学生が戸惑う場面には、なぜこのテーマにしたかに常に立ち返らせ対応した。先行研究にあたる作品を確認・整理する助言を学生に行い、手づくりのクレヨンや絵本に取り組ませた。

（方針）の 2「乳幼児期の特徴ある行動や生活の姿の実態に即した支援」については、隣接保育園児との実践の場を今後は視野に入れて検証する行動を持てなかった点が反省点であった。

○作成した教科書・教材

・「保育内容（環境）」
‣各回の教科書スライド資料
‣振り返りのためのワーキングペーパー
‣指導案作成時の手引き（プリント資料）
‣幼稚園実習書類「実習にあたって」の書き方指導マニュアル（プリント資料）

〇自己評価
・「保育内容（環境）」
‣各回の教科書スライド資料について
後期授業時のすべての授業時にスライド資料を準備した経緯は、配慮を要する学生に聞き取りやすく見えやすく理解しやすくするためであったが、これまでの教科書を用いた口頭による授業を、スライド資料中心にした授業展開に変えたことにより、配慮する学生が特に意欲的な行動姿勢をとる結果となった。具体的には、教員の意図した手作りの保育教材を用いて模擬保育の発表を行い、他学生への刺激となっていた。
‣振り返り（ワーキングペーパー）評価について
学生個々に向けて、教員の文を添え返却した効果は、学生との関係性を築く手立てとなった点と、２つ目に、学生の記した内容の見方や捉え方の良さ、考え方の工夫ができている等、彼らの授業で習得したことが文章化でき、その内容こそ、学生の習得できた成果である。学生 1、２名、捉え違いの回答の間違えた学生への支援が課題であった。
‣幼稚園実習書類「実習にあたって」の書き方指導マニュアル（プリント資料）について
使い慣れない教育（保育）用語を使い記述することは、「実習にあたって」を書くレベルへとつながる。解説を読んだかの有無は、学生が共感する文脈を挿入した箇所をレポートに見ることができた。その結果から、概ね達成ができた評価であった。
‣指導案作成時の手引き（プリント資料）
「子どもの姿」には活動設定理由があること、「環境の構成」には導入に欠かせない雰囲気（準備物）が大切であること、「ねらい」には主活動を実践する教師の願いと幼児の発達課題を含ませること、以上が指導案作成時の手引 3 観点である。各学生が計画する活動に 3 観点を含め、理解を基に、学生は指導計画案を立ててきた。全学生の指導案に教員の指導・助言を加えて返却した。実習園へ持参する指導案の作成工程を伝えた。模擬保育は指導案を書画カメラで他学生と共有し、ねらいと活動名、幼児への導入方法とまとめ方を全員が他学生に向けて紹介するといった切り取り式模擬保育であった。授業内において、指導案（書画カメラ活用による）を提示し導入とまとめ方部分の模擬保育を全員が行い指導助言の学生間交流ができ、目的は、概ね達成することができた。
【専門演習Ⅳ】
（計画）の 2 にある「事例を基にディスカッションを行い」「他者の意見を受け入れ、自分の意見をまとめる機会を適時持たせる」ことについて、テーマが違うゼミ仲間同士だからこそ刺激的で効果があるはずであった。ゼミ内の場が和み、雰囲気を高められるはずならば、今後は、意見交流の場を持つ工夫を持ち、仲間で助言し合う機会を適時に持つことが良い改善点であると思えた。

Ⅱ　研究活動
〇研究課題
幼小接続を目指した森林環境教育のプログラム開発
― 幼児が自ら遊び始める保育教材をつくるために学生は何を手立てにするのか ―

○目標・計画

（目標）

本研究の目的は、SDGs の視点に基づく（幼小接続を目指した）森林環境教育のプログラム開発を行い、実践を通してその効果を検証することである。

（計画）

2022 年 1〜3 月　研究者合同オンラインミーティング・資料収集

2022 年 4〜7 月　名古屋市平和公園のフィールドワーク：森林環境教育のための教材・教具を共同開発

愛・地球博記念公園 もりの学舎（長久手市）を訪問し、森林環境教育の実践について知る

2022 年 8 月　研究会 調査結果の検討（愛知東邦大学）

2022 年 9〜12 月　協力校(近隣)と連携をもとに幼稚園・小学校における実践を通じた森林環境教育のプログラムの効果検証、森のようちえん（岐阜県、滋賀県）や近隣の保育園と連携し実践する

2022 年 10 月　SDGs AICHI EXPO 2022（常滑市）において中間報告および実践検証

2022 年 12 月　研究会調査結果の検討（愛知東邦大学）

2023 年 1 月　初等教育カリキュラム学会（広島大学）において報告

2023 年 3 月　研究報告書をまとめる

○2015 年 4 月から 2023 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

・江田司　梶浦恭子　田中まさ子　谷口篤　横井志保　他 8 人『教育実習の手引き(幼稚園・小学校)』一粒書房、2016 年、 第 1 章第 3 節　幼児教育に携わる者に求められる専門性　第 2 章第 3 節 指導案の立て方・指導案 35-36、43-46

（学術論文）

・梶浦恭子「0〜3 歳児の自然体験遊びについて」名古屋学院大学論集. 社会科学篇 = Journal of Nagoya Gakuin University 54(4), 171-181, 2018　http://doi.org/10.15012/00001066

・梶浦恭子, 西澤彩木「自然物を手にする幼児はどのような表現をするのか：幼児の行動記録を手がかりに」名古屋学院大学論集. 人文・自然科学篇 = Journal of Nagoya Gakuin University 53(2), 125-138, 2017-01　http://doi.org/10.15012/00000877

・梶浦恭子, 今村光章「“森のようちえん”の幼児が触れる自然物に関する実証的研究」環境教育 = Environmental education 25(1), 176-183, 2015-07　日本環境教育学会（査読有）
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsoee/25/1/25_1_176/_pdf

・梶浦恭子, 今村光章「なぜ幼児は「森のようちえん」で枝を拾うのか」環境教育 = Environmental education 24(3), 137-144, 2015-03　日本環境教育学会（査読有）
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsoee/24/3/24_3_137/_pdf

（学会発表）

・梶浦恭子 「森の動植物に出会う幼児は自然体験活動から何を磨くのか（２）-特性を持つ 5 歳児の手の平や手指の動きを観ることから考察する」

How infants who encounter flora and fauna are refined from experience in nature (2)-A study of characteristics 5-year-old children hold while using palms and finger to

observe －日本野外教育学会 第24回大会　研究発表抄録集　2021-11
・梶浦恭子 「森の動植物に出会う幼児は自然体験活動から何を磨くのか」一般社団法人日本環境教育学
・梶浦恭子 「大型の動物に触れる幼児の身体行為と保育者の役割」一般社団法人日本環境教育学会，2020-08
・梶浦恭子「自然環境に関わる乳幼児と保育者としての役割」一般社団法人日本環境教育学会，2019-08
・梶浦恭子「自然環境と幼児」一般社団法人日本保育学会，2019-05
・梶浦恭子「自然体験活動からの学び：対象（自然）物に向き合う場面において幼児と保育者が並列の位置で育むもの」一般社団法人日本環境教育学会，2018-08
・梶浦恭子「自然物に出会う幼児の表現行為を探る」一般社団法人日本保育学会，2018-05
・梶浦恭子「自然物にふれる乳幼児の表現行為を探る：0～3歳児の抱っこや手つなぎから」日本乳幼児教育学会，2017-11
・梶浦恭子「乳幼児が自然物とかかわる意味を探る：森の世界の出来事における手の行為場面から」一般社団法人日本環境教育学会，2017-9
・梶浦恭子「自然物は幼児にどのような表現行為を生みだすのか：森のおやこクラス「おさんぽさん」の素朴な見える動きから」一般社団法人日本保育学会，2017-05
・梶浦恭子「保育者から研究者へ－現場出身者の課題を共有する」日本乳幼児教育学会，2016-11
・梶浦恭子「自然物に触れて遊ぶ幼児の手がつくり出す表現を探る」日本乳幼児教育学会，2016-11
・梶浦恭子「自然物を用いた幼児の造形活動における指導のあり方」日本環境教育学会，2016-8
・梶浦恭子　作品発表「かくれんぼ絵本」絵本学会，2016-5
・梶浦恭子「自然物に触れて遊ぶ幼児の手の動きに注目して」日本保育学会，2016-5
・梶浦恭子「自然物（枝など）に触れて遊ぶ幼児の行動からみえるもの」日本環境教育学会，2015-8
・梶浦恭子「枝を持って遊ぶ幼児に関する一考察」日本保育学会，2015-5
（特許）
（その他）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）
特になし

○所属学会
日本環境教育学会，日本野外教育学会，日本保育学会，日本乳幼児教育学会，絵本学会

○自己評価
研究課題は、ほとんど達成できなかった。唯一、野外教育分野の研究方法や環境教育分野では平和、人権教育をテーマに地球温暖化の環境教育の考え方の動向が得られた。各学会の研究会に、オンライン参加し見聞を広めることはできた。
以下、具体的内容となる。
・野外教育学会：島田 英昭氏（信州大学）「野外教育研究法における統計手法を更新しよう 」2023－1/22
・日本環境教育学会「日本環境教育学会関東支部第50回定例研究会」2023年2/26日３月研究集

会 一般公開シンポジウム「環境教育と平和教育と人権教育の歴史的対話」プレイベント　環境教育，平和教育，人権教育の対話の創出にむけた事前勉強会では、高田久美子氏（麻生大学）のリテラシーとしての気候変動学～のパネルを視聴した。それは、地球温暖化予測の最新情報を交えて、生き物観察（生物季節観測）が気候変動影響への関心につながるといった地球環境の意味を学生に伝える意義を得ることができた。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

(1)　キャリア支援プログラムの体制構築

(2)　キャリア支援センターの本格稼働

(3)　IR機能を生かした進路サポートと課題の抽出

（計画）

(1)　キャリア支援プログラム構築

① 1～2 年生支援、②3 年生支援、③4 年生支援、④インターンシップ、⑤東邦 STEP

従来の3、4年次のキャリア・就職プログラムを検証し、成果に結ぶ内容とする。

また、1年次から様々なプログラムを準備してキャリア選択に結ぶ。

東邦STEPは、運営を見直し離脱者防止対策を講じる。

(2)　キャリア支援センターの本格稼働

キャリア支援センターを本格的に稼働のために、ハード面の整備と業務を明確にする。

(3) IR機能を生かした進路サポートと課題の抽出

2022 年度から低年次のデータを蓄積し、将来的に進路支援に生かす基礎づくりを行う。

3～4 年生においては既存の J-NET システムの積極活用を推進し、

個別企業の採用手順や試験内容のデータを取得し、次年度からデータ活用が可能となるよう整備していく。

○学内委員等

幼小教職課程・保育士養成部会、キャリア支援センター運営委員会

○自己評価

キャリア支援センター運営委員会の報告よりそのまま添付

(1) キャリア支援プログラム改変・構築

①1～2 年生支援、②3 年生支援、③4 年生支援は、概ね達成することができた

④インターンシップ、⑤東邦 STEP では、あまり達成できなかった

(2) キャリア支援センターの本格稼働は、概ね達成することができた

(3) IR 機能を生かした進路サポートと課題の抽出は、あまり達成できなかった

教育学部では、就職活動の早期化により一般企業への就職希望者の活動が出遅れないよう、ゼミ担当者による教職支援センターへとつなげる支援サポートが不可欠である。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

岐阜県私立幼稚園連合会子育て相談事業の巡回相談事業に携わり、園の相談内容に貢献する

（計画）

幼稚園内には様々な行動様式で自己表現する幼児（援助を要する判断をしかねる子など）の園に訪問し、観察し、幼稚園のスペシャルニーズという判断基準に同意する。

〇学会活動

（目標）（事前記載項目）

以下の学会活動に参加し自己研磨する

・日本環境教育学会、日本野外教育学会、日本保育学会、絵本学会など

（計画）（事前記載項目）

学会研修会に参加し、多様な保育に関する情報や知識を得て、授業開発を行う

〇地域連携・社会貢献等

（目標）（事前記載項目）

①岐阜県私立幼稚園連合会子育て相談事業において幼児の多様な問題の助言や提案する

②稲沢市立図書館サポーターメンバーによる、絵本を教材に、親子で一緒に製作活動の企画運営をする。

（計画）（事前記載項目）

・幼稚園内の様々な行動様式で自己表現する幼児（スペシャルニーズの子）の状況を把握し、報告書の作成をする。

・祖父江の森の図書館において製作活動イベントを行う。内容は、からくり仕掛けの“「しかけえほん」を親子でつくろう”をポスターに掲げ、製作指導・援助を行う。コロナ状況によって、開催しない場合がある。

〇自己評価

・学会活動は、計画を達成できなかった。

ただし、オンライン参加ではあったが、野外教育分野の研究方法を、また環境教育分野では平和、人権教育をテーマに地球温暖化の環境教育の考え方の動向について、分野ごとに見聞を広めることができた。

・地域連携・社会貢献等の①②は、計画を達成できなかった。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

特になし

Ⅵ　総括

2022 年度、教育学部の初等教育コース、幼児教育コースの学生には、幼児期の発達や幼児が抱える課題に応じた指導の在り方への関心を持つ大切さを習得するようにした。入学からの学修意欲を向上させ保育、教育現場の実習に向かうよう、その準備に特化した内容にした。教育実習現場に初めて学ぶ学生には、不安にならないよう指導案と実践演習を行い、スムーズに教育現場に慣れ責任ある実習生としての行動に移せるよう授業課題に力を注いだ。

教員の研究テーマについては、SDGs の持続可能な社会をめざす環境教育の意味を含む。幼児期は自然環境への関心が高まる一方で、直接体験活動が各保育園幼稚園、こども園の教育・保育活動に反

映できているかどうか、近年とても疑問である。環境教育については、保育、教育職に就く学生に自然に触れて遊ぶ従来のかかわり方にとどまらず、生命に触れて生態系を知る、感じる、関わり合って存在する循環を理解する手立て等、学生にこそ学ぶべき重要な研究のテーマであると考えている。2022 年度は私事の都合により研究・教育活動に貢献できず継続できなかった。

2023 年度は、体調を調整し、研究テーマの自然体験活動には、対象者として学生と共に挑みたい。学生や学部の先生方とも共同の体制で教育活動や研究を進めたいと考えている。

以　上